花譜

二松學舍
760
4

門號 ニ 14
巻 760

帝國圖書館藏

花譜卷之下

七月

蘭

は花上代よりいろ〻名いとゞあゝいきはりしるし。
そもゝ乃古書ゑ蘭とゝなへいとゞはりあるもの也。
古奇ゑらはるゝとゝあるもの。はゝ花ゑりハ
あゝぶ。は花ハほ代ゑゝ人乃ゑてはゝそひとゝいゑれ
はゝ。ゑ物ゑりまゝゞれぶきてゝとゝ香(かう)氣(き)ゑゝ。ゑ家
ゑ文稱ゑゝ故ゑ世ゝゞゝりてゝゑを中ゑゝ人て序
上乃ゝ流ゝゝゑ。元四程あり。大葉 中葉 小葉 玉巻(たまき)
ゑゝ。中蘭ハゝゑゑ世ゑはゝゝ蘭ゑゝ。大蘭ハゝ

葉ハやゝの大さ也とし。春花さくハ山蘭ともいふ。
此蘭より也なり。小蘭ハ一茎小なり。甚くさに二種
あり。一種ハ葉筋のなりて直なり。一ツ香けあるを
よし。一種ハ葉並のなりて横にたれあり。是香次なり。
絹糸のとき細の葉なり八香よし。四種ともに黄金墨(りんきよ)
をおりあれきけしき風空害霜つゆさしにあてべし
へからず。樹下ハ日かけハ陰地をこのみあまと好む。又
濕(しめ)きをきらふなれども深きをきらひ。薬をせざれ鉄刀
を用へからず。寒風雪霜にあてれもうちまゝ痛(いた)む
暑月にハ十日しま所にをくべし。うちかわく日ハ濃(そゝ)くべし。

秋もまた一度植かへべし。はしてもおなじくそれ
を湿らし切りて根くさる。然るに冬へて十月は
めより土蔵の内にあるひハ日のあたる座下に
出へし。亦ハ紙桶あるひハ箱に入て気のもる所を
ほりておへし。或ハ長く日かげくらき所ハよし。
あるひハ徳りをもてみるなり。冬乃月を宝とく水
を濃(そゝ)くべし。二月中旬ほとくにとりだす時おもひ
置きて元気をつべし。二月より九月乃末までし常
ハ日かけに日の時く日にあて雨にあわすへし。土のかわく
ハあしいうるおひすべし。冬もおし。又平地とかこ

ごとくして澆すれば新になるべし○蘭とゆふる
にやしなふる肥土を用ひ又黒土にあはせてまぜま
ぜこゝにくはへて入べし。盆乃底に穴明ひろ
くぼちかけられ又或小石を穴乃うへにのする
所に盆ごとにつきわたを入べしそれやよし。
又こまかなる肥土を入るべし。加ぜ土あしゝ。盆乃底乃
穴ふさげ水を澆ときこぼれてくさる。盆にあまれ
多くなりたらば。盆中にひろくして根乃つまりたる
やしなふべし。凡蘭ハ人乃垢(あか)けきらの手ゆれ(きんずん)の汁
をしも澆(そゝ)ぐべし。盆にあくるハ毎朝鱗(りん)のを澆(そゝ)ぐべし

魚乃洗汁をそゝぐべし。貝類つくるハあしゝ。ちんしう
なぎの洗汁よし。時々かけてよし。一度に多く掛(かく)る
事あし。かつてかくべし。正月より二月迄ハ一切こや
し用べからず。子細あるものや。或曰一切こやし
ハ魚乃汁をもかけざるがよし。根に塩割(そは)つけを
ける。○或曰蘭ハあつくして雪月によりて根を
ほりおこしてかへまくは竹乃をかりて
根をきりこれをはさみにかけるにほるべし。鉄器(てつき)を
いむ。根をまげてまくべからず。すぐなるハよくまし
積あるハ積まず。根乃性に疵(きず)つけてもよからず。

凡蒙ハ糞小便をはるるといへども薄汁もあし。但糞を和したる肥土ハ二三年を久しくする物にて土をかへてよし。温湿をいとふ故ぬしの業をゆへ根ハ枝葉に比べてそだつて葉ハ枝と共に枯ハ枯くなるを葉を清へし

東蒲塞牽牛花　子をまきて生ず。夏ハ蔓はびこるとかくもよし。或ハ竹ようへてまとはせるで乃ちくるまして蔓をはしらせ花をひらかしはあるるおもしろしをくへし。七月中旬後ちぢまるの種を毒実

ちりきるる。ちるあとはさきつゞけまさぐみに

結梗　二月に根をうゑ葉白二ツあり。みちのくにて紫ちりちりあり。八月もあり。古今ちりとかくしるしあり。一名を一株ともあり。根ハ葉と

一株　多くうゑるもよし

鶏頭花　葉白く茎うすあるを八花よりうすく葉筋と鶏頭とちがふ。又茎に濃あるを花よりうすく葉筋をうへし。花ちるあり。赤紅ぶとうゑ細ニ種あり。或ハ平乃ちちりて自生す。雪ふる苗生す。ふるを化まち苗生ずるを遅し。葉わきを

芽をもて食す。芽より紙をうつす。
はハ芽を摘てこれを乃一花を摘
きりたる小枝を摘きりてこれを乃一花を摘
まして。秋は花開ちるまでいとをもて久を留
ものなり

樓花 多葉あり葉緑白あり。ひらてく
ぼく。初夏より初秋よりはじめ。万葉集乃今
の人ハ初秋をもて咲と云とあり咲きり
たるあるをもて咲とあり乃ちなげきるる紙なり。
今世俗より初秋といふ。古今集乃
ものなり

丈草 花史曰丈草一丈ばかりなるもの
なり。ひろ一丈花をもてくるなり。
ちりぬるくもの花日に日に倭俗用葵と云
鶴膝草 和名くるふもも云乃草より苗紙
生ず七月より開いろ乃ちりつへし赤
丈よりて魚乃あるしけを根よりくへし
禎桐 季草より喬木北新海桐乃ものなり。夏秋乃間
ひらく花をひらくてくるくるくるくるを平唐ち
さくなを桐ものなりたるぶりとも云。或北
ものなり人てくるくるなてをもて印ぶり面

かんとする前に霜に行べし。近ごろ出しかゝし云
風を防ぎて後。冬ハ圃地に入れて置けバ必枯る。或曰
冬より春の間雨風のあたらぬ所に置けバよくなれども
物によせかけしてよく日にあたる様にすべし。乃
末に出しおきてなるべし。春暖になりてつちをさし
より出してよくすべし。何れなるとも一所にかため埋
てもよし。又地にそだてゝ冬ハおほふて霜を
し根に土を置ておほふべし。或云冬ハ庭下の
暖なる所にうつしやしなふべし。冬も時々水を
そゝぎ候。冬ハ水をきり切るべし。春

すでに枯てみえても見た目にはまだ生きて居るなり。風にあたらざる
暖なる所に置べし。下葉を取根ぎはに水をかけて春
して且つ又とろけるをうけてよし。根より子を生ず

紫苑（あきわすれ）　あきにさきて華と云。古今集にハ志をにとよめり
花むらさきなり

睡蓮（すいれん　ひつじぐさ）　三葉（みくさ）のごとくにして、みつの花蓮に似て
白くして小さく、暮になりて花ひらく。昼ハ水の
まに出て夜ハ水の中に入ると云。酉陽雑俎小戸録に草
綱目等に記されり。蕨ちとそハ水中に生ずるを云義

白粉花（おしろいばな）　花黄赤二種あり。六月に咲く。ねをきる

葉ごとに。ある根も又生ず。七月より花落て
秋ふるまで花あり。是ハ三月ハ咲ずして子ハ
胡椒乃ごとしぶらうの白き粉あり。是を[illegible]
もて花[illegible]

午時紅　孫史ハ切ふ。當伝曰倭俗ハ午時花と云
鳥根ハ不生。毒を抜ものを日中ハ花ひらく
故名とす

八月

鹿鳴草　八月ハ花をひらく一万葉集ハ椿又黄子ハ
けり。俗ハ萩乃実ハ[illegible]

又ハ和名ハ多く俗ハ[illegible]。或曰花実ハ天竺花と云
花ハ[illegible]。花ハ萩ハ古歌ハ[illegible]
生し花多くあり。多ハ葉ハ[illegible]
生ず。又多ハ一枝ハ根ハ[illegible]
生ず。神中物ハ[illegible]
一枝ハ[illegible]花ハ[illegible]
多ハ[illegible]
[illegible]。本ハ根ハ[illegible]
一根ハ一茎ハ[illegible]
又一枝ハ紅白ハ[illegible]。又白萩

[illegible]

木芙蓉　紅なる葉あり葉ごとに四ちくく
ひろく葉あり紅なるもあり。又白きもあり
一尺ばかり陽に向へる花なり。花は嫩枝にさきて
四月中旬花ひらく。白きもあり。
本屏花　この花乃香恒にかをりこはあれども淡く
ほのかなる佳花なり。この花の六尺ばかりなるもあり
中。猶乃蕙蘭此類を用れども花ひらくこと遅生八月
よりひらけはじめてうるはしく
女郎花　七月より花をひらく本絵源順に女郎花と

[illegible]
[illegible]
八月に花をひらく。初めは八月ばかりより淡黄色なり。
白花のものもあり。花ひらくに八月よりひらけはじめて
九月まで
獨活藥　山人根を用てあぶりてのちにくみて
よく乃鹽をまぜくくとかくしてよく
よりて
附子　この花俳文にこの葉菊に似たり。人参をこの
やうにこの根ありてこの花ひらく毒草なり

九月

菊　月令 尓雅 花辭 の世て上代より名を聞ら。

屈原淵明等の詩人達士乃賞せし花なり。殊に陶淵明は秋のひとりしらぬ時に百花こぞりて咲ぬるを見て。花乃隱逸なるものと周子も云り。

ものの香かくもちもてすれてめてしらもはく淵明

花乃上ふてすんし。詩ちよ多く淵明しらはまし

いつしか今人のあるものく花をもしぶるなり。月令

鞠有黃花といふまた南史に陶淵明ふてすんし。後世

よハ多くやう多くなりし。宋乃劉蒙ノ菊譜ハ三十

五種あり。又門花 鞠也 楊妃 あり。

又道家八歳ハ菊乃名多く載せり。中ハ醉楊妃紅

牡丹のごとき色今日本にあるなり。宋ノ范石湖ノ

菊譜ハ七十一種とのせたり。今 本邦にあるところ

二百餘種なり。○菊花を含まれし紫色のと葉ちゑ

分とあらくし年とのびるもし本草にもるなり。風俗

通ハ南陽縣乃人菊の下流をのみて皆ながら

百二三十歳百餘歳七八十歳をもりて菊花を分

とかくして氣をそしなしもしなし

ともるなり。陶淵明が詩に菊爲制頽齡といふ

よくしつとのみるべしとなり。菓子を服するには六月
みて味甘きを用ゆべし。○菊は六月あるは菓と
為べしなり。六月は一度根をほりて面の芽
菓と為べし。又七月は一度面の芽は菓とすべし
雨水はまくべし。なほ根よりくさみとなる。菓と為て
用ゆべきなり。根ばかりていまだ芽もくさること
を心とすべしなり。秋は長ずるもかんとすべし
あしし。又もとはきしかして芽はなるもあり。○あ
の菊とうつる農政全書曰凡菊はうえ六事
あり一に八貯土肥土と是乃ち菓とみ

味て乾くをもうて土乃深軽するもみをとりて
埋べしなり。再菓とうけわかるべしなほ土中よりあ
なり。春は地なほ出て。ほうく教度べし。虫蟲を
菓の穢と去る。不去ハ蔓てくらう紅虫 玉蟲
班蝥 をして菊を害をなすなり。土とはさく
してなるべしなて菊はうえてほひ土と用ゆべし。
菊とうえて三年と乃雨ふりて土をくく根ふ
くしけ土とうて根とたりうへしかくのくとん
と早をとるべし雨乃深とあるべてを根ふくべし。二に八
留種 冬のうちめふ菊はくさんを貯とむ等

多めあり。臘月よりこれを蒔くなり。殺後かくのごとくすれば燥みて水ぐ。へて面の如く仕まつし。八月に至りて開花するなり。

分秧　まづ乃ち菊秧を根より解き多くして土中に堆黄白色なるべし。ひげみして白きは不可用。新よりすきまる鋤地をよくしたる肥よろしくしたる自然と分へし。時節の日わりへてまた拓乾きて活ぐべし。ふるひ土を窟とを云へし。ふるひ出の害あり。へてはもいて日あらひよくしし日にあつるなり。毎朝あ

ひ洗よもを洗へしくるりまる日ハあれば洗てよし。苗乃心をくまなきまでとまとし。先ま乃ち日あらひとまとし。先ま乃ち洗を。乃ち又肥をもいて洗を。乃ち人に毒を洗へてよし。はと并にのみとまとしゆるべし。井のみもしらもも純のはなへし。四ハ登盆　之多の苗を洗へしぶるまと洗へてよし。別苗堅者にして在地可以耐日。根土を必廣たるほうへし。擂おこりくるる事土を堆へし。陰時をみてのはまくるん場減をへし。然をして後肥の洗へし。久雨ハ臘土をとりてるるはへしぶ下洗

名を見て其心ばえを知れるなり。凡菊の根上
より芽やし故常の如くなれども。五ニハ 理緝
菊一尺ばかりなるもの。ちぢれて。多く枝
をさしのべ。絡まりもつれたるを四段をさし形
へし。花の形ハ大小をみな。のこらず。六有ハ四五
蘂。次ハ七八又ハ次ハ十餘。小者ハ二十餘蘂。耳菊
宮菊ハ獨梗みして千花あり。五ニハ 護類
菊やしくもぢずして行とえて。ゆしみ見よ。揺さ
むしてもふ。菊の傷る蝕多くハ蠹甲をそなへかけ
で蝕必ず蠹甲を集まるを。化ずるようつとし。文もり

ずなる菊尾にて。ふるる虫。蝕蝕すること。ふるる
菊ばかりなるを。出ることなく。ふるて。深し。菊苑の傷し
所をみてしかつ。ふるて。毒とはなるべし。秋後ハ又虫
ふる。多くこれ。ふるる。新菊ばかりなる。
凡菊ハ毒あるゆへ蝕ハ毒として虫ばかり
虫もて蝕食て菊もぢず。虫白風ばかりなる
帚を作りてふるべし。浅黄のあるべき菊の
葉のもとのこくなる虫あり。蘂ばかりなる虫ハ
ふるあり。蘂ばかりなる虫ハ
（道生八歳日菊を切る三月中すぎる

うゑなほしよりゆるしたるうゑ土よくして根を堅くし。雨中よ植へうゑ。湿泥根をつけてあしくやくわりハよくうゑる。○又曰ねをくゝして湿とけ。海を底にてあらはなどすべし。毎年ある土を名へし。鶏鵝の糞ハ用ひる和ーてうゑしつゝみ土の大きくしてるうゑ。糞あらハ二度注ぐし。花ひらく時一度注ぐし。かくのごとくすれば花大にして色久きよしよ。○系ハるよ小枝ハ出るハやくつゝ切るべし。葉ハ出いろく多しかたとりてとりゝて。肥の用意ハしくみて明ある土を用ひ名づくべし

苗を植ず。此虫辰巳ハ出ずして午ハ出ず。○菊術もそのよきものを作るとき。ゆるやかにして肥ゆるとき。おゆるやかにして肥ゆるとき。してじ。○あ年ちりうてこゆる肥土をこうへおきて根ハ深く張るよしをうへし。ちゐよハ根くもとゆきぐゆゑ。ゆるしてすきて彩根をーやとし。○倭俗の日菊ハひるくして眼下よ見ちとぬくしうるとゝみよ。ゆゑ七月つゝよハ葉ハ宵ハ枝をわて葉枝ハ用ひ生ずるハ命ある七月よりて旁枝ハ中ーみて大きくなるハ歩ゝ餘をつゝみ。七月の節よりて根ハ出ず

とけりとうりて養分をしかるべしあらと養分を注ぐべし
○又曰面白くするには年代久しき地といひ高地なるべし
上土三寸とりて他物をまぜべし。面根は土はなるべしうち
てしかくつるかぶとりてかくけりやくるみるるべし。
かくけりて土和らかにして培やすし。
又養気も底くもりてあしい。ニ地より三寸の間と
和りみてうつべし。凡花菖は湯とさらしたる菊特
らし。雨ちぶさ交ハ菊ゑんやすし○花至能の日毒人
許のさきを頭をつみ去。根をあらはしあらはれ出みつと
ちごとよみたるなり。枯よりて一切り出る枝はなるべ

切りし。人力つくめ土又膏沃花亦為之屢寥○古今
醫統曰菊とうるゑ六要あり。一ハ日あたるよし二ハ
其畦とくくしてを濃とひろくし年々を地をえ彩
土とうくく舊土と去へし。三ハ小竹とをてを苗とゆ
ゑりゆいをへし。四ハ乾土をいて培へしく面よ
根くをわる。五ハ枝ををて正幹とをりへし。
六ハ枯葉のをとを根よををて好葉と見てをを落
へし○倭俗菊を移る一法を用ゆ中用小あぶみと圃
ハ肥土ををあぶみてひろげ葉を上をけてり。こゞ
くくしてくくをを乾を。小石を根をくばをり。毎年ハ

一所に集りぬとすれば。三月苗苗とそろうて
する池の高さと四方の水深て三月ち乾し置る
彩なと高さよりかくて苗ゆへ。日ゆへ
苗のそやくもせを一度ちかけもてはどてふ
つくりかつ苗はのそうしけし米海と小俵とあるを
よませてこのとくば。じげるふハ三月を。秋の節
ふ入て表博小俵をのをと二ちとんちちく流
他の米ハ三月。ちりみ生てなハ小俵を減し米海二分
小俵ちりと合とぬくるハ根ちりなるを苗疲
苗のひくくなきて右のめと用れと京の海ぬちり。

九月の根よ人米ハ米ちるまちるまちり根ちるまちり
とちりて遠くちるくし。苗ハ三月中の終くのしのさハ
あしい。梅雨乃うちふ毒と一度。七月中元乃ぬ毒
一度。九月乃ハ毒とちるくちる。七月以後毒を延
くと出ちて○又日苗とちるハ三月ちり。田土ちり
土と中へちを月ハ生てあるくまちて
ちぬ。ちてちり人米とハ俵ちて和ちちして初の
土ちりけちるちるちりちるちるして
毎月ハ生ちるちるちるちるちるちる。梅雨ハ後ちるて苗の根ま
ちるて。ちるちり八九月ハ生ちて二三度右乃土ちと

おくべしわきめハあしへおほちおよおそをかけても
よろし○戊日梅雨入より一度か葉を宜四五六月ハ
三度宛切。七月初より枝をちらしあまりめゆいハ二度
葉をとるべし凡菊八月をかぎる○一説曰此説おもきむねまハ次のほとに
またる苗植かへり凡世俗乃説に三月中に摩て植
としよすハ植まても避て小暑比から葉をかへして
日つよく当てをりて生をもしてはやかそし。梅ニまかニ
よくかわきへし生根しやをし。又色もし度て水
さくある菊をおもくわかちちめて一編ニ
編へくし戌ひに見れ列て清地よかけ避てかす。

凡菊苗をうつすにハ先田土を乾して大指の太さにして
菊の苗此在とちりして三ツ丸めたる土大きさうつへしいさ
やかし菊ぬうつるにハ世俗ハ糞土を用る故に苗けにみ
枯やすく容を避て。うつし植月より糞を施して能し
よろし土ふえてもえ土ハあしいあり土を用べし。次ニハ
黒土の砂と地まぜるる和土ニ菊ハよろしくよろしき耐
土と混めてうつへしつまやさし。おろつけて降雨後土
うるく夕ハ根のまわりの土とやりつけてしらしよる夕ハ
土乃やりうかりうぬまる。すでに分けてハ地のうき
ぬきらへ葉をうらおもに苗よくかりて三月乃末より

とおほりてはしめて栗をうゑへし。梅雨ぬけあるは凡
三度うゑへし。梅雨ぬけあるは栗をうゑざれば世俗乃語なかく
わろし。梅雨乃おそるべき栗は色黒くして栗をとさり
はるへし。ふるはるはさくらとそぐり働は
もゝはるはやしみるもの。閏月より肥土をふくく
栗をとりて肥をしてはしめ。八月下旬
ちくちくうゑへし多八度。根出と節出とを
はるへし。夫出はるやう出あるを栗をすゑう
うゑて行とうゑめて栗乃うゑあるを教
ふし。[illegible]ハやうてゐるもはれく。苗八根

乳つゝ物をする苗をもつて。七月乃節
より脇枝をもみるをはるへし。但枝をとりのゝ八根
北方にちるをあるをうゑへし。梅のうゑへし。梅
あくまて八葉北枝氣をくして花をうゑる。梅乳
[illegible]する苗八枝まて八月節よりもつゝめて
つゝをとをもて拵る小つゝをはるるあり。栗
苗北氣日をうゑて桃北氣北をくしてつゝ八度ゝ
も小みてはるへ摘をうゑて掘をもとへし。八月初
根をうゑをほりてやうゑる栗を一度へし。
或小使をくくもあり栗のうゑに八ちゝ。

をおくべしとかの毛詩に見えたり

秋牡丹　道生八月に葉牡丹に似たり花八月出葉心
より苗八月根より生ずるなり花八月出葉心
へより或ハ二月に苗ともに云九月の節此葉を園史
ふものせり

鬱金　宮氣とおなじる宮月八根をほり出し一年の葉
此土をほりてうゑ出しうちの時れ出しうち
へし月をもて初りよりへて八月まで行る

通和　鶏冠の葉に似てあり花あり秋葉色と成く
草葉此苗を作りそく園求よりへて住居を作る

○菊をとりて皮を作り茹てして食と蕗のこゝろし
毒なし河豚魚及生堅魚乃毒一切はぐくを食すり
くを汁とりてのむ甚たしかりを鮮を云
ハの中ほり鮮冬ハしきり季時ハ食物中等
と考へし

十月

宮菊　葉も花も常の菊より細なり十月に黄花を開
中に臘月に至る花なきをしらく花を出すなり
ほり京都ハ宮を菊と称して葉もみるなり港
より菊と因ほるを生ずる時節なる花より別に記す

葉小役を生じ枝をそぶりとなしおくべし花の色
きびしくかれをそひしへし

枇杷　十月節分後花ひらく香うし湯地をうへて根
をそらよ人参をおくへし玉地のきらひなし　蝟牛
枝よつをとり去へ一二実八四月結菓よををて
熟す

柔梅花　色ハ梅ヲ似て白くまたしひらくるり葉ハ
山茶花ヲ似てかしをそ一二丈よつる心
あく赤土を去よろし

海紅花　柔梅花の紅なるもの深色を二色あり

ありこれを一二尺のすりをもちくあたるすみ色
をして十月より二月よりる花のうるうる
く蕾ひらしみの間をもくあるきをもきていく市こ
実をへしをを赤土を去よろし正月五月赤土を枝をを

十月

水仙　本草曰ちをを地ををきて花ひらんこや世地をハ
花をしをあ北初根を生ひ出ひらんへの小役り
一枝ひらしてあるこるるあるけおくへし又
ををををしてもしをきくして濕ある地をろ

○篤信曰居乳必用みを生ひて小役を一枝ひらを

とあり畦を作て大小各別ようみへし肥土ようへを上
よ麋土をつりみへし小者よ花不開者ゟ枝幸ゟ
根出て花ゟ〳〵ゟ家あり金盞銀盞あり金
盞銀盞し法書皆九月初ようとあり位湯地ゟ
ゟ出て白蕊の度ゟ出て有ゟ八月の節ゟ初ゟ植
へし麋ゟ人麋ゟ麋小使ゟ〳〵人多く八七月ゟ
ゟ侯信のゟ人ゟ一法あり有の比ゟ出を
ゟ〳〵ゟ麋を多くゟとゟゟもろを
家を上ゟ肥土を出し位根をゟへしゟけきゟ
ゟ〳〵ゟ交のゟもきゟへあり害ゟ

付ゟ出へしとゟ〳〵ゟ根ゟ例ゟ出ゟ有ゟ出ゟ
ゟ人し湯地の南ゟ出ゟ有ゟ根ゟ花ゟ〳〵
ゟ出ゟ出しゟ出ゟ土ゟ出ゟ土ゟ出ゟ
ゟ月ゟ出ゟ〳〵ゟ花ゟ中華ゟ書ゟ八湯地ゟ
出ゟ出ゟ湯ゟ有ゟ出ゟ有ゟ出ゟ出ゟ
ゟ人ゟ有ゟ湯ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ
ゟ根ゟ南ゟ出ゟ出ゟ花ゟ開ゟ四ゟ有ゟ人し出ゟ花
中ゟ出ゟ久ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ
く香ゟ出し宮ゟ花ゟ出ゟ有ゟ出ゟ出ゟ出ゟ
○園史ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ出ゟ

[illegible]

千日紅　三月より種をまくべし　[illegible]

色みて花多し　[illegible]

[illegible]

三波丁子　山椒及千日紅を年寄間[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

扶挿蘭　菊　牡丹　水仙　蓮　[illegible]

[illegible]

[illegible]

世人此花を[illegible]

十二月

蠟梅花　此花梅乃形ハ[illegible]梅と同[illegible]

しかれとも蠟の如くなる故蠟梅乃名を付る

[illegible]此書を[illegible]

花細みして黄色[illegible]

蘭のごとく故ニ古人[illegible]

宋儒此花を[illegible]

[illegible]

[illegible]

迎春花　臘月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日土服するすみのうちにけり歌をみるあるをそこに
に花あり二月中旬わかちうへ
○百花のの枝葉実の花を賞するへきあたる記て

草

蘭草　ふちはかまもらたもあらさるも古かるよ
ものより用ふるまるり師よ多し秋花さく葉ふとし
○ゆ録云二月よ宮根ちり苗をうゆるあるこ下屋の所
よりよりよ蘭草　沢蘭一類二種あり○潛波新巻に蘭
ハ百年のもとよりよ筍花葉なり重瞳四つるへの所謂
蘭草ハいなの世よ人の愛翫する花ふとしよりよ蘭草

ハ此ものといふり和俗よ水ちりといふ物のるるし
山家家ふしはしくいふへ下ちし語彙易林記博河
ふるに蘭草といふ俗ハこれるあり
菖蒲　和俗石菖と云物を用ひ盆ふ人て序上此清流
ふんあをつねよふくもふれを凡の上ふをけを新鋼と
ふり用をやしふあるよふ〳〵拓家をはふ人し鉄と
酒を塩と蘭小便をいふを加をいむ又猫の鈴ふる水
あるふのし園史よみふふ海色の塩気あるあを通
へふふ根ふふみハ石菖根乃土氣をあふして多く
あるあわふに縄みてふふふけ下根を綱刀ふ

てまりなるへし細かにゆかにいりくしつかへし其年の
後もくるしからすとそへてうへし ○本草曰臘月
移之尤活やすし 以瓦石器種之且暮易水則茂水濁
及有泥滓則萎 ○臞仙神隠書曰石菖蒲をうるへて
几乃上におきて夜は書をみる時の烟気をうけて目に害
なからしむへし 蘇東坡か曰凡草生石上須微土以
附其根惟石菖蒲濯去泥土漬以清水置盆中可数十
年不枯節葉堅瘦根鬚連絡蒼然於几案間久更可喜
○俗に云今端午に用て菖の枝にかくるもしふとしつ細、
是泥菖蒲の古名なりとあやまりて又時珍説て

石菖蒲といふくさもおほくこゝにあるはけしきの
長寸許なるは銭蒲といふ是ハ石菖蒲とかはりて細なれ
ともうるへし又石の鱗石菖といふハ別に一種なりと云
これにたる気園史ニ曰別に細葉なるものあり瓦乃
くぼみに用て盆中にうへし菖蒲の性土を用ひてあしく
石を用ひて植うへきなり名花譜曰 性は水を好
目をおかさる清水をひやしてうへし
石韋 石上に生す故にいふやまとし又一種石韋に似て小
葉のものは星ある葉を金星草といふもの也
これ又うへし

石斛　本草曰五月に苗を生し七月花を開く有る
実を結ぶ節の上に根を生ず切りて砂土に植ハ
活く或篠間のもりてのきの下にうけとるべし
後人し年を経てもう生ずるのとあり
苔　樹下石上枯木瓦の上すべて湿ある所に生ず或ハ
ひとあるいはりてかくもすし微雨ふれと和漢の詩
句に多く詠ず器物に入ハ毛もくもくあり紙を人し是
故に毛もくもくと云ふ又ちぢり苔といふ和名抄に
木の枝に出りて生ず
景天　人あり多く多くの人或つきゝの間に西國に八

ちりあつて生ずるし云へし
佛甲草　三種ありつるあるとの内に茎ちゝ赤
茎とぐるものあり
螺厨草　石ある所ハ枯木あるハ土にて生ず
忍草　茎葉ハ似り假山の石に多く人し後に
り石あるよりあり
貫衆　葉の形ちりて似て茎葉あつし山中石に生
ず四月に出ちて生ず假山石に植へし
茅膏菓　多くてりて実あるくして赤く実人しるさ
枝すはすぐ日にけしをまけば二三年の間に

実なる西国にてぶうしと云花史曰葉は竹に似て
実は枝ごとに生ずあるいは米のごとくなるべて
ちりて雪花のごとくなり梅の中よりをひくまち
道士は八月に出るはこれなり
麥門冬　大小二種あり大小ともに冬を閑
一云実緑色にして小形なり大葉は蘭に似
又訓言葉は葉の林中に多し小葉はごとくがひ
げに又又ごとくなりは大小ともに
夏四月ちりて肥地にうえまた根大く小仮を
ちりて小葉麥門冬は花園にあり梅雨の時
此かぎりしたへし月令廣義曰黒土と黄砂とよろし
肥土なるべし毎年六月九月土用寒をおくべきな
ほ紙にしるし
吉祥草　和俗訓言葉と云葉の形大葉に似て
葉すくなく短し花なし一説園史曰九月に小花を
いだく深山にあり人しるを幸とす
けしきにて年中みどりなり
珊瑚　山梅に生ず葉は橘に似て色一ぶりなり
節に秋の末なる実あり実あくして赤子人し注
比をなを樹陰にあり日にあたる不栄あるはは

為ようの人屋下よりおもて孫ひこ園史日珊瑚樹つくり
代とくみて少き文白花をかく秋紅葉をむすび
珊瑚のしゝ鬱々としておもんじ二三月よりうら徳
細幸　賀茂葵色多世る細幸といふを壮衛(とのゑ)ゝうゝ
みてもとりちゝてあやまるもし平まるみゝうゝ山
城葵茂多しかゝ別ようしうゝに所ようり土地宜
しうゝさ生て拾る陸地をぬき赤むらかとま生て小
代屋ケ湯ある所ようて男ようをうむ方よ
葉ゝをまゝに拾ゝうちと男ようをうまいるゝに種
てはうの人やゝを初ゝ子してゝゝゝ